

新たなエレガンス：御深井（17世紀初頭～中期）

茶人・古田織部が 1615 年に没した後、その弟子である小堀遠州（1579-1647）が幕府の御用学者として台頭してきた。織部は、千利休（1522-1591）と同様に、自然のままの姿をたたえる「侘び寂び」の美学を提唱した。一方、上流階級である遠州は、宮廷生活を反映した洗練された様式である「綺麗さび」を好んだ。その影響を受けて、茶道具も装飾のないすっきりとしたものが流行した。

「御深井」と呼ばれる茶道具は、灰長石の半透明な釉薬が特徴で、色は黄緑から濃い青まで存在する。この色調から「美濃青磁」と呼ばれることもある。形態的には、型や鋳型を用いて、ここに展示した 5 つの碗のように、完全に均一な食器セットを作ることが多かった。これは織部とは逆で、セットであってもすべて完全に同じものではなかった。また、御深井の陶工たちは、装飾は手描きではなく、摺絵や貼り付けによって行う傾向があった。

「御深井」の名は、名古屋城に由来するといわれている。名古屋城では、城主が城内の「御深井丸」と呼ばれる場所に窯を築いていた。城を支配していた徳川家の庇護のもと、この窯で多くの茶道具が作られた。その多くは贈答品として送られ、その様式は「御深井丸」の名で知られるようになったのである。